
ロシナンテへようこそっ！

邊川 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロシナンテへようこそっ！

【Nコード】

N20130

【作者名】

邊川 弘

【あらすじ】

彼氏いない暦——19年。

灰色の学生生活に終わりを告げるべく、いま野々下可奈子^{のしたかなこ}が動く！
身長140cmというミニマムサイズ。

男性から異性として扱われず、子供として処理され続けた19年。
このキャンパスライフだけは譲れない！！！！

彼氏GETを目標にちびっ子大学生が奮闘する恋愛活劇！

第一話「見つけた私の王子様！」（前書き）

> i 1 2 5 8 8
— 1 7 7 1 <

第一話「見つけた私の王子様！」

第一話「見つけた私の王子様」

皆さんどうも初めまして。私の名前は、野々下^{のした} 可奈子^{かなこ}。今年の春から大学生をしている今時の女の子です！

ああ、憧れのキャンパスライフ。

サークル活動に合コン！ツーリング！友達の家押し掛けてのお泊まり会！そして、そして…素敵な出会い！

そう！出会い！正直なところ私の生きてきた19年で甘酸っぱい思い出は皆無に等しく、振り返ってみれば気の合う女友達との思い出がありません。

だから、このキャンパスライフ。素敵な彼氏を作って薔薇色に染め上げて見せると固く心に誓い、鼻息荒く学園という戦場に入り込んだのですが…。

「うー、こんなはずじゃなかったす」

2時間目の講義が終わり、やってきたのは食堂です。

食堂の右端のテーブル席がいつもの指定席。

その学食のテーブルに突っ伏しながら私は世の中の不条理を嘆きます。

。。。つすというのは私の口癖です。

小さい頃テレビで覚えた口調らしいのですが、真似をしているうちにすっかり板についてしまいました。

「まったく、入学してまだ1ヶ月でしょ？もう弱音？彼氏作るんっす！って息巻いてた可奈子はどこ行っちゃったのかしらねー」

彼女は私の親友、榊原^{さかきばら} 菜奈^{なな}です。中学校からの付き合いでヘタレな私に何かと世話を妬いてくれる良い人です。

「菜奈はいいつすよね、社会人の年上彼氏がいるつすからね」

「フン悔しかろう。くやしかったら可奈子も早く彼氏作りなさい。いいものよー、横で支えてくれる感覚つてのも」

「私だって好きで一人でいるわけじゃないつす。これでもこの1ヶ月、新歓、合コンと週3ペースでイベントをこなしたつす」

私はお気に入りのポシエットからスケジュール張をとりだして4月のページを開きます。

そこにはぎっちり書き込まれたスケジュール。

「わお、インドア派の可奈子にしちゃ随分ハッスルしたわね。で？収穫は？さすがにこれだけやって声掛け0って事はないわよね」

「まあ、2、3人には声掛けられたつすけど…」

確かに声は掛けられました。

一人目はでっかい眼鏡をかけて額にバンダナを巻いた人でした。息遣いが荒く汗っかき、人と話慣れていないのでしょうか、よく噛みます。おかげで何をしゃべっているか分かりませんでした。

二人目は寡黙な人でした。おしゃべりしましょうと声をかけてきたのに目の前に座ったまますっと私を見ていました。

三人目は酔っ払いのオジサンでした。

しかも、隣のテーブルから乱入してきた部外者です。何故か苦勞話を聞かされ好きな事ができるのは若いうちだけだと何度もリピートで話していました。

総合すると収穫はなしです。

むしろこれらは収穫してはいけません。

「うわぁ、酷いわねそれは」

「自分で言うのもなんなんすけど、私って容姿はそれなりに整っていると思うっす」

菜奈は私から少し距離をとり私を観察します。

「そうね、客観的に見て可愛いと思うわ」

「性格もそこまで歪んでないっす。男性にも尽くすタイプっす!」

菜奈はこめかみに指をあてて過去を振り返ってみます。

「そうね、男好みの性格だともうわ」

「なのになんでモテないんすか!」

「そうね、私があなたに教えてあげられることは一つだけよ。可奈子、ちょっと立ってみて」

私は立ち上がります。

菜奈も立ち上がります。

結果として生まれたのは絶望的な身長差と残酷な現実でした。

身長140cmジャスト。

ちっこいです。未成熟です。

そう、私の身長は中学の頃から横這い状態、身長だけならともかく女性のサイズこと3サイズも未変動なのです。（まあ、ウエストが動かないのは嬉しいのですが…）

おかげでばつと見た姿はまさに、…子供なんです。

「か…神様のバカヤローっす!!!」

現実を再認識して泣きそうになる私の肩を菜奈がそっと抱いてく

れます。

「可奈子、強くなるのよ。この現実を受け入れない限り彼氏を作るなんて夢のまた夢よ？」

「私、強くなるっす！幼児体型に負けない強い女になるっす！」

「よく言った可奈子くん！さあ、あの夕日に向かって走りだそう！」

「はいっす！コーチ！」

一昔前の青春ドラマよろしく食堂を走り出す私と菜奈。

まあ、古い付き合いの友達との身内ノリなんてものは何処でもこんなものです。私達は走り出した勢いで本来の目的である昼食を摂ることにしました。

「わたしはいつものデラックス定食っす！菜奈は何を食べるっすか？」

菜奈は発券機の前で腕を組考えます。

菜奈は私と違って発育が良いですが食べたなら食べただけ太くなるのが悩みだそうです。

「むむむ、あまりお腹減ってないので野菜サラダで」

カツ丼を押しそうになりながらも、サイドメニューの野菜サラダのボタンを押しました。

痩せ我慢している菜奈は可愛いです。

ちなみに私がいつも頼んでいるデラックス定食はエビフライ、ハンバーグ、とんかつが乗った大皿と大盛りご飯、さらにきつねうどんまでついてくるボリューム満点のメニューです。

「んふふう、さすがデラックス定食っす。これで700円とは大学

食堂おそるべしっす！」

「ちょ！可奈子！前！」

「んへ？」

このときの私はデラックス定食をゲットした喜びと、お盆にのつたどんぶりで前方の視界を十分に確保できていませんでした。

私の不注意。

菜奈の声に反応した時にはもう遅すぎました。

目の前には人が……。

ガシャーンッ！

「うっ、痛いっす……」

ぶつかったショックでお尻を打ってしまいました。

お尻の肉付きがイマイチな私には結構なダメージです。
なかなか起き上がれません。

「大丈夫か？怪我は？」

そんな私に優しいげな声と共に差し出されたのは一本のしなやかな手でした。

視線を上げてその手の主を確認するとそこには信じられないほど美形の男性がいました。

無造作に伸びた、しかしながらさらさらな黒髪、どこか女性を感じさせる整った顔立ち、モデルのようにスラッと伸びた長い手足。
少女コミックでしか見たことのない黒髪的美男子がそこにいたのです。

「は……はいっす」

私は差し出された手を興奮気味に握り返します。
トクンッ。

私の小さな胸が高鳴ります。

これは恋なのでしょうか？

触れた手はスベスベで柔らかいです。でも、大きくて力強くて…
…素敵です！！

「よつと、ごめんな。考え事してたんだ」

私を引き起こしてくれた彼はポケットからハンカチを取り出して
うどんの汁にまみれた私の顔をポンポンと拭いてくれます。

「ま、怪我がないならいいや。じゃ、俺いくから」

彼は私の頭にハンカチを乗せて背を向けます。

「あ、ハンカチ…」

「やるよ、それ」

そういつて去って行く彼の肩には、うどんがぶら下がっていまし
た。

「ちよつと、可奈子大丈夫？ちゃんと前見ないからよ？」

心配した菜奈が駆け寄ってきました。

あつという間の出来事。

未だに夢の中のようなフワフワした感じです。

まだ手に残るあの人の感触。

「あわ、あわわ…て、てて」

「どうしたの？可奈子…」

「ててて手！手握っちゃったす！に、妊娠しちゃうっす！」

「落ち着け！」

ボグシャ！

菜奈の右ストレートが私の顎を正確に捉えます。

「手握って妊娠っていつの時代の都市伝説よ」

菜奈のツツコミは相変わらず強烈です。

でも、おかげで意識がはつきりしてきました。

「痛いっす。夢じゃないっす」

「そうよ。まったくびしょ濡れじゃない」

ということは、さっきのあの人も現実ですか？
現実です。

そくに違いありません。

「見つけたっす！私の王子さま！」

遂に見つけたっす！

私の王子さま！

どうやら彼は大学でも有名人らしいっす！

彼との接点を模索するうち、私は彼の行き付けの喫茶店を突き止めるっす！

次回「はじめてのバイト、喫茶ロシナンテ」

問答無用のドタバタ劇！奮えて待てっす！

第一話「見つけた私の王子様！」（後書き）

さて、はじまりました。

とりあえずは無事に終わらせることを目標に頑張っていきたいと思っています。

連載ペースは週、または隔週になるかと思われます。

少しでも興味を持っていたただけなら気が向いたときにも覗きに

来て下さいww

でわでわww

第二話「はじめてのバイト、喫茶ロシナンテ」

第二話「はじめてのバイト、喫茶ロシナンテ」

ここは大学内のある会議室です。

「それじゃあ報告を聞くつす！所轄！対象の詳細をつす！」

「えー、対象の名前は^{おおさわ}大沢 ^{よしと}義寅。文学部近代情報科2年、容姿端麗、成績優秀で全女学生の憧れの的。おまけに実家は大手海洋運送会社を経営。お金持ちのお坊っちゃまらしいわ」

そう、彼の名前は大沢 義寅。1つ年上の先輩でした。
おまけに彼氏にしたい男？1にランキングされるほどの人気者です。

「う、うへえ、ハードル高過ぎるつす」

報告を聞いただけで憧れの大沢先輩は遙か遠くに感じられます。

「言い寄る女性は数知れずだけど浮いた話はまったくなし。あの美形も相まって男色趣味が面白可笑しく語られてるくらいよ。」

「それはそれでありつす！」

「まあ、とにかく可奈子の身長では世界記録でも出さない限り跳べるハードルじゃないってこと」

「ちよっと！身長は関係ないつす！」

「でも、勝算はあるの？私が見たところ絶望的なんだけど」

そうです。

確かに絶望的です。

しかし、私はとっておきの“秘策”がありました。

「ふふふふ、そこはぬかりはないです。菜奈は駅前の路地を入ったところにある喫茶店知ってるつか？ロシナンテ言うんすけど」

「へえ、知らない。そんなところに喫茶店あったんだ」

「どうやら大沢先輩はこの喫茶ロシナンテの常連みたいっす！」

「よくそんな情報仕入れてきたわね」

「ふふふ、捜査の基本は張り込みっす！」

「…まさか尾行したの？」

「オフコース！3日に渡る可奈子刑事の努力の結果っす！」

「世間ではそういうのストーカーって言うのよ？」

「聞こえないっす、とにかく大沢先輩は喫茶ロシナンテの常連なんす！そしてトドメはコレっす！」

私を取り出したのは1枚のチラシです。

“バイト募集。来たれ若人よ。お洒落な喫茶店で働こう。喫茶ロシナンテ”

手作り感あふれるそのチラシはバイト募集のチラシ。

悪いなと思いつつその喫茶店の店頭から引っぺがしてきたものです。

「バイト？なるほど、確かに自然な流れで先輩に近づけるわね。可奈子、今回は異常に冴えてるわね」

「愛の力っすかね。でへへ」

「でも、可奈子バイトしたことあった？」

「昔、おばあちゃんの畑仕事手伝ってお小遣いもらったっす……！」

「可奈子、それバイトじゃないわ」

「えー……！」

衝撃の事実でした。

菜奈の話によれば履歴書とか書いて面接を受けに行かないとダメらしいです。

「いい？とりあえずそのチラシに書いてある電話に連絡してバイト希望の意思を伝えて面接の日取りとかを決めなきゃいけないのよ。あと必要なものとかも聞くのよ？」

ブルルルルッ

「もう！電話してる！？」

プッッ

「あ！もしもし。私、野々下可奈子って言っす！バイトしたいんですけど！」

「あー、もう。少しは敬語ってものを……」

「はい！はい！判ったっす！よろしくお願いするっす！」

ツーツー。

「どうだった？」

「面接は明日になったっす！時間は適当。持ち物もなにもしらないそうつす！」

電話の内容はいたって単純でした。

バイト大歓迎。

時間はいつでもいい。

履歴書その他必要なし、身ひとつで来てくれればいいといった内

容です。

「可奈子、そのバイト先やめたほうがいいわよ」

「え？なんでっすか？よーし！かわいいウエイトレスになって大沢先輩のハートゲットするっす！」

——そして翌日。

「ついに来たっすね」

私は喫茶ロシナンテの前にいました。

それにしても寂れています。

店の外観は訳の分からない植物の蔦が巻き付き、その隙間から辛うじて店の看板ロシナンテが見てとれる状態です。店の正面には窓はなく中の様子も伺えません。

唯一存在する木製の扉に掲げられた営業中の札もなんだか冗談めいて見えます。

「むう、本当に大丈夫っすかね？この店」

いまさらながら少し心配になってきました。

恥ずかしながら私はバイト経験がありません。

親にとって子供はいくつになっても子供とはよく言いますが、私の場合そのあたりを色々な意味で体现しているわけだったりしまして、親の方もなんの違和感も持たずに“お小遣い”システムを継続していた為です。

あくまで大沢先輩にお近づきになる為のバイトですが、これは私にとっても良い転機かも知れません。

「まず、入ったら店の人に元気よく挨拶っす！第一印象はかなり重要っすからね！」

パチンツと頬っぺを叩いて気合いを入れます。

「さあ、初バイト面接！可奈子、行くっす！」

カラコロカランツ。

ドアを開けると、上に取り付けられた来客を知らせるベルが鳴ります。

そして薄暗い店内には……。

全裸のオッサンが直立不動で立っていました。

一瞬にして凍り付く店内の空気。

「いやあああああ！」

「ぎあああああ！」

一拍おいて響き渡る2つの悲鳴。

私だってレディです。

あ、あんなブラブラしたものの急に見せられたら悲鳴の一つだって出ます。

いや、そんなこと言ってる場合じゃありません。

悪質な変質者です！

早くこの場から逃げださなければいけません。

「あわわ、く…黒いぞう…ゾウさんっす！妊娠しちゃっす！お、お巡りさん…！」

「うおーい！待って！頼むから待って！誤解だから！後生だからあ！」

悪質な変質者、中年戦隊全裸マンが逃げ出そうとする私の腰にすがり付いてきます。

「きゃあああ！やめて下さいっす！」

「いや、とりあえず落ち着け！クールダウン！ほらあ、怖くないよお、ただのダンディなオジサンだよお。人畜無害だよう」

そういつてオジサンがにこやかに微笑みます。

しかし、依然としてオジサンは全裸な訳で、その微笑みはイヤらしい笑みにしか見えません。

「いやあああ！誰か！誰か助けて下さいっす！」

「だから誤解だと言っとるだろうが！」

「全裸のオッサンに抱きつかれてるこの状況になんの誤解もないっす！」

「だって、ここで手離したら交番に駆け込むつもりだろ！おまえ、とりあえず話を聞け。おい、ジェニーてめえも見てないで手伝えての！」

ついに困り果てたオジサンはジェニーなる人物に助けを求めます。はて、この狭い店内に私とオジサン以外に誰か居た記憶がありません。

一体どこに……。

私は店内を見渡します。

がしかし、それらしき人影は見受けられません。

ギョルリ。

次の瞬間、私の背後に突如生まれた気配と共に私の首を屈強な腕が絞めあげます。

「へぐわっ！」

チョークスリーパーホールド。

首を絞めると言っても、呼吸ではなく血流を止めることにより相手の意識を落とす技。

徐々に意識が遠退いていきます。

ああ、私の人生こんなことで終わってしまうのでしょうか。

せめて大沢先輩の腕の中で死にたかった。
そして私の意識は暗い闇の中に落ちていきました。

——あれ、ここは何処でしょうか。

私が目を覚ますとそこは知らない部屋でした。
どうやらソファーのようなものの上で寝ているようです。
うつすらと開いた視界であたりを見回します。
薄暗くてよくわかりませんが何処かの喫茶店でしょうか…。

「……………ん？喫茶…店？」

その単語で、寝ぼけた頭が一気に覚醒します。

「いやああ！妊娠しちゃうつす！」

「しねえからっ！」

ベシッ！

ツツコミはすぐ隣からきました。

恐る恐る隣を見ると例のオジサンがにこやかに微笑みを浮かべています。

「全裸マンっす！」

「違えよ！いい加減にしろよ！今度は！服着てるよ！」

確かに今回は服を着ていました。
白のシャツに黒いズボン。首元には赤い蝶ネクタイ。その上から

茶色いエプロンを着けています。

「まあ、お茶でも飲んで落ち着け」

私の前に差し出されたのはおしゃれなティーカップに注がれた紅い飲み物。

フルーティな香り、匂いを嗅いでるだけで心が解きほぐされていくようです。

私は吸い寄せられるようにお茶をいただきます。

「おいしいっす」

それは変質者が淹れたとは思えないほどおいしいお茶でした。

「ふふん、うまいだろ？少しは落ち着いたか？」

オジサンは誇らしげに胸を張ります。

実際、このお茶は本当においしいです。

少し見直しました。

「はいっす、取り乱してごめんなさいっす。このお茶オジサンが？」

「オジサンとはひでえな、ま、もう31だからお嬢ちゃんからみればおじさんか。俺は灘なだ源一郎げんいちろう この店の店長だ。ちなみにお茶を淹れたのはジェニーだ」

どうやらお茶淹れたのはこのオジサンじゃないみたいです。見直して損しました。

ん？ジェニー…………。

びくっ！！

私は意識を失う直前のことを思い出し、咄嗟に首をガードします。

「ははは、ジェニーは普段はそうそう襲い掛かってこねえよ。紹介しよう、うちの看板娘のジェニファー、みんなジェニーって呼んでる」

店長が私の後を指差します。

すると背後に気配が生まれます。

振り返るとそこには80年代を思わせるモコモコパーマを当てたどこにでもいそうなおばさんが一人。

Tシャツにジーパンといったラフな格好の上に店長と同じ茶色いエプロンを着けています。

しかし、どう見ても生粋の日本人なんですがなぜジェニファーなのでしょうか。

「……よ、よろしく、オネガイする…っす」

「……………」

無言です。

もしかして私は嫌われているのでしょうか？

「あー、ジェニーは無口だから言葉はめったにしゃべらない。俺も最後に声聞いたのは20年以上前だし」

「ちょー！それ無口とかレベルじゃないっす！」

「まあ、そろそろ本題に入ろう。君は昨日電話してきたバイト希望の子だろ？」

「あ、はいっす！野々下可奈子っす！よろしくお願いしますっす！」

そういえば私はバイトに面接に来ていたのですでした。

あまりにショッキングな出来事が続いたので忘れていました。

「とりあえず、バイトは歓迎だよ。最近仕事するのがかつたるくて、でも従業員は俺とジェニーだけだからさあ、ジェニーの淹れるお茶は絶品だが接客は期待できないから」

「そんな理由っすか」

「え？なにか文句あんの？」

「…ないっす」

この店長、ダメ人間です。

変態な上にダメダメのダメ野郎でした。

「じゃー、時給とシフトなんだけど……」

カラコロカラッ。

その時、来客を知らせるベルが店内に響きます。

「ちわー」

ドアから現れたのは……大沢先輩でした。
来た！来ました！

やっぱりいつ見てもカッコイイです！！

「おー、義実あ。いらっさい」

「あれ？店長今日は普通の格好してるんですね」

「あー、今日はさシユールな方向で攻めてみたんだけど。いろいろあつてさ」

どうやら全裸直立不動はシユールなジョークらしいです。

というかいつもあんな事しているんでしょうか。

どうやら大沢先輩は慣れているようですが、普通のお客さんが来

たらず間違はなく交番コースになる気がします。

そんなことより、大沢先輩が目の前にいます。

ここ数日ストーキングばかりで後姿ばかりだったので、こうして向き合ってられるのは幸せです。

は！そうです！忘れるとこでした！

「お、お、大沢先輩！」

「ん？あれ？うちの大学の子？誰だっけ？」

うがああ！たしかに食堂でぶつかったただけだけど覚えてくれなかったです。

ちよっぴりショックです。

しかし！

「こ、これ。ありがとうございますっす！」

私が差し出したのはあの時貰ったハンカチーフ！！

しっかり洗濯して！アイロンかけて！胸元であたためておきました！！！！

これで思い出してくれるはずです！

「ん？これ俺の？…んー、覚えてないな」

なんとっ！！

これは予想外。大沢先輩まさか大ボケキャラですか？

「この間、食堂でぶつかって転んだ私を起こして、うどんの汁を拭いてくれた時に…」

「んー、あはは。ごめんね。そんなことあったっけ」

ぎゃあああす。

大沢先輩はハンカチを受け取りながらもまるで覚えてなさそうです。

私の運命の出会いは大沢先輩にとっては数日で記憶から消え去るほどのどうでもいいことだったみたいです！

「な、なんでもないっす。ぐすっ」

わかってました。

どうせ、わたしなんて道端の石ころと同じくらいの存在だって。でも、やっぱり涙が出ちゃう、お、女の子だもん！

「あ、あれ？これ、おれが泣かした感じですか？」

「義寅が泣かしたー！悪いんだー！あ、その子明日からこの店で働くから可奈子ちゃん」

「ご、ごめんね。可奈子ちゃん。ほら、涙拭いて」

大沢先輩が手にしたハンカチで私の涙を拭ってくれます。目の前には大沢先輩の顔が……。

う……う……カッコイー！！！！

しかも優しいです！やっぱり大沢先輩は私の王子様です。

「す、すみませんっす。もう大丈夫っす」

「それで可奈子ちゃんさ、シフトの件なんだけどさ、どれくらい出れる？」

シフト？

ああ、菜奈が言っていました。

シフトとはバイトに出るスケジュールのことです。

大沢先輩はほぼ毎日ここに入り浸り。

となれば答えはひとつです!!

「週7でお願いするっす!!!!!!」

——次回予告

いろいろあったけど喫茶ロシナンテでバイトすることになったっす!

これで憧れの大沢先輩と毎日一緒にいられるっす!
しかし、現実はそんなに甘くなかったっす!!

次回「労働の日々、喫茶店は大忙し」

問答無用のドタバタ劇!奮えて待てっす!

第二話「はじめてのバイト、喫茶ロシナンテ」(後書き)

少し時間があったので2話投下。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2013o/>

ロシナンテへようこそっ！

2010年10月12日17時43分発行